

先住民村落におけるキリスト教会

先住民村落における災害復興を考える際に、当該村落の宗教について理解することは重要である。前回（7月号）、先住民であるブノンの伝統的な宗教文化が、日本統治期に大きく変容させられたことを述べた。もともと主食であった粟作の栽培スケジュールに合わせて受け継がれてきた宗教儀礼が、日本統治期に水稻栽培が奨励され、宗教儀礼による謹慎期間や儀式自体を簡略化するよう指導されたことによって、変容を余儀なくされたのである。さらに、1937年に日中戦争が始まるころから、いわゆる「皇民化教育」が強化され、神社参拝が強要され、国家神道に基づく天皇を中心とした国家の臣民としての意識が植えつけられるようになった。

戦後のキリスト教伝道

日本が第2次世界大戦に敗北し、日本による台湾統治が終わり、統治者が日本から中国（国民党政府）に替わるとさまざまな変化が生じることとなった。その1つが先住民村落におけるキリスト教の伝道である。筆者の調査地である高雄市桃源区のブノン村落にはキリスト教のプロテスタントである長老教会があるため、その長老教会の歴史を通して先住民村落におけるキリスト教伝道と教会の役割について考えたい。まず1955年3月に東部にある花蓮から2人のブノンの信者が訪れ、福音を伝え、村人はキリスト教を受け入れることにした。しかし、この2人は滞在期間が限られており、村人を引き続き導くことができないため、信仰は途絶えてしまった。同年7月から8月にかけて三民郷（現在の高雄市那瑪夏区、調査地の川を挟んだ北側）からブノンの信者が次々と伝道に訪れ、3世帯が家族全員入信することになった。10月から信者がさらに増えたため、それまでは3世帯が順番に交代しながら日曜礼拝を行っていたが、空いている土地に木や草で作った18坪の集会所を建て、村人の中から2人の長老と2人の執事を選出した。

翌年1月から8月にかけて南投と花蓮から福音を正しく指導するためにブノン信者が訪れた。1957年には長老、執事の改選を行い、山地巡回伝道に訪れた伝道師が聖歌の指導を始めた。村の人々はとくに音楽に興味を持ち、幅広い年齢層が混声合唱を学び、教会に入信した。1959年5月に高雄山地区会が設立され、同時に花蓮出身のブノンの蘇（田）文徹（Tanapima）が三民郷と桃源郷の巡回牧師に就任した。1959年5月には信徒の増加に合わせて、伝道者からの勧めにより木造教会を建設することに決まった。教会落成の感恩礼拝には約200人が参加した。

道路開通と移住、教会移転

1971年に高雄と台東を結ぶ南部横貫道路が開通したが、この道路から集落まで徒歩で1時間（約5.5km）も離れており、交通が不便だった。政府は僻地のインフラ整備を重視し、南部横貫道路が開通したことから、この道路沿いに集団移住するように勧めた。これにより新しく住居を建設することとなり、交通も便利になった。翌年11月に道路沿いの新しい居住地に礼拝堂を建設することが決まった。新しい建設用地としてある村

人が40坪の土地を提供し、簡易的な木造の教会を建設した。1973年に信徒による定期大会で教会建設の5カ年計画を決議し、1978年に鉄筋コンクリート2階建ての教会を建設することが決まった。1階には幼稚園、日曜学校、2階には礼拝堂を設ける計画だった。

このように教会建物を拡張することになったのは、道路沿いの新しい居住地に移動してから電気、電話や交通などインフラ整備が大幅に進んだことによって、村民の生活レベルも向上したことによる。同年、建設が開始され、長老を長年務めた人物が自身の土地186坪を教会拡張用地として新たに提供した。ところがガソリン価格の上昇、通貨と物価の上昇、さらに1年以上続いた干害のため農作物が不作となり、工事を一時中断せざるを得なくなった。この危機に、信徒たちが組を作って、長老と執事がその組長となって交代で政府の山林の仕事を請負って、得た収入の中から生活費以外を教会設立の経費として支払うこととした。不景気が続いたため、建設計画を2期に分けて、1期工事として1階に暫定の礼拝堂を設け、景気が改善してから2階に礼拝堂を建設することにした。1981年、3年がかりで第1期の建設工事が完了した。移住後の村は南部横貫道路沿いで、風光明媚な少年溪レジャーエリアに位置し、外部からの訪問者も増加していることから、1991年に教会を増改築することを決めた。1階の礼拝堂を3階建てにし、2階に礼拝堂、3階に会議室、さらに宿泊施設である霊修会館や食堂を建設することになり、翌年1月に正式に完成し、使用が始まった。

教会組織が促した氏族を超える村単位の集団意識

調査地における長老教会の歴史において注目すべきは、教会組織が現地の各世帯の代表から選ばれた長老や執事などによって形成されていることである。そのような組織によって建設・運営される教会は、戦後の村の人々の移住や生活インフラの改善、道路の開通と観光客の増加などとともに発展してきたことがわかる。日本統治期に高地に分散するブノンを集住させ形成された瑞穂村の場所から、戦後開通した南部横貫道路沿いに移住したことから教会も移転した。さらに、教会建設に必要な資金がインフレによって集まらなくなるという困難に直面した時には、教会組織を生かして、政府の植林や山林の管理などの仕事を交代で請け負って、村人がともに苦楽をともにするなかで教会建設が完成していった。このように、教会組織が、氏族の境界を超える村単位の集団意識の形成を促したことが見て取れる。

長老教会では、教会の指導者として派遣される牧師や神学院から派遣されてくる卒業生の伝道師が、それぞれの礼拝などの宗教儀礼を司るが、教会活動を実際に取り仕切るのは現地信徒から選ばれた長老や執事の役職に就いている人々である。調査地では、住民のほとんどが信徒であることから、基本的には年功序列で、年長者がそれらの役職に就いている。さらに、日曜礼拝が毎週集落の人々が集まる場となっているため、現在でも行政による広報活動や原住民に対する公的サービスの業務や補助金の給付申請などの案内も教会を通じて行われている。